

巻頭言

PFM (Patient Flow Management) について

杏林大学医学部付属病院 病院長
近藤 晴彦

2026年度から杏林大学医学部付属病院ではPFMセンターが本格稼働いたします。PFM (Patient Flow Management) とするのは文字通り「患者さんの流れをシームレス (すなわち途切れなく) 管理する」ということです。

入院診療を受ける患者さんには様々な支援が必要です。PFMセンターでは、多職種により、前方連携 (来院前からの受け入れ)、入院前支援 (オリエンテーション、持参薬鑑定、口腔機能評価、栄養相談、周術期管理 (手術症例))、退院にむけた支援、後方連携 (リハビリ目的での転院等)、各種相談窓口など様々な患者支援を行います。さらに、入院中の病床管理をシステム導入にて強化します。

PFMを推進することにより、①クリニカルパスやコンサルト基準の標準化、ならびに患者さんの身体的・社会的課題の把握と早期介入などによる医療の質向上、②医療資源を集中させることにより医師や病棟看護師等の業務負荷の軽減、③入院在院日数の適正化等による経営効率の改善、そして何よりも④患者さんが安心して治療を受けることにつながる という大きなメリットがあります。

具体的には、外来担当医はクリニカルパスに則った指示書を記載します。それを受けてPFMセンターでは入院前検査と結果確認、患者情報確認、入退院前支援等を行います。この結果、患者さんは安心して入院に向かうことができ、入院時の病棟業務も軽減されます。また入院中は病床管理システムによりリアルタイムに各病棟の負荷を確認し適切な病床管理を行います。退院・転院に向けての調整は必要なら入院時から行い、後方連携にもDXを活用して連携医療機関に情報共有を行います。

このPFMというコンセプトは、1999年に東海大学の田中豊氏が提唱し、2006年の東海大学病院の新規開院に際し導入されましたが、次第にその意義が認識されるようになり徐々に多くの病院に広がってきました。実は、当院でも2016年に患者支援センターとして入院前後の支援をする枠組みは作られましたが十分な機能には至っていませんでした。ただし、当院では2017年に全国的にも先駆けて周術期管理センターを発足させ、予定全身麻酔手術の患者さんに対しPFM的な管理を行うようにしており高い評価を受けていました。2024年度途中からは内科予定入院例へのPFM導入の先駆けとして、消化器内科のEMR症例でスモールスタートをしてみました。今後はすべての予定入院患者を対象にPFMを行っていくことを目指しています。

このPFMをはじめDXの活用等により医師の診療に関わる負担を軽減することで、大学病院としての研究・教育にも力を注いでいけるようにします。2025年度からは臨床研究センターも開設して臨床研究支援体制を整備するなど、病院改革を進めており、今後これらの成果を杏林医学会にも還元していけることを期待しております。